

---

# ラバラーゼ

あそうリネ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】  
ラバラーゼ

【Nコード】  
N5211D

【作者名】  
あそうリネ

【あらすじ】  
過去や未来、様々な思惑が絡まりあつ。

## 第一話：竜胆 case 1

人々の歓声が聴こえる。

城の門が開かれると、城下町にはたくさんの観衆が見えた。

数十人の兵士が観衆に囲まれた道を行き、それに続いてジェンシャンも一步を踏み出した。

美しい顔、しなやかな体、艶やかな身のこなし、豪華な衣装。

彼女は手を振りながら観衆に微笑みかけた。

観衆は彼女に心を奪われると同時に嫉妬する。

そしてそれは観衆のみならず、城内の者達にも通ずる感情だった。

「ジェンシャンさまあ」

一人の小さな女の子がジェンシャンの元にてちと歩み寄って来たが、兵士に止められ、その拍子にこけてしまった。

「あら。大丈夫？」

ジェンシャンはその女の子に近寄り、彼女を起こそうと屈んだ。

その時だった。

ドンッ

硝煙の香り。

ジェンシャンが後ろを振り替えると、１メートルも離れていない場所に銃弾の痕があった。

キャアーキャアーキャアー

あちらこちらで悲鳴が聞こえた。

「時計台から音がしたぞ！」

「ジェンシャン様は無事か！？」

「ミス・ジェンシャン、さあ城に避難しましょう」

ジェンシャンは何がなんだかわからないまま従者や兵士に守られながら城へ帰った。

## 第二話：牡丹 case 1

「　　チッ」

まさか失敗するなんて。

男は銃をおろし、時計台からすぐさま脱出した。

城の兵士達が時計台へとゾロゾロとやって来たが、既にそこには男は居なかった。

男の名はトニー・ピオニ。職業は『なんでも屋』だ。

人殺しだろうが引越しの手伝いだろうが金さえ払えば何だってやるのだ。

そんなトニーのもとにある日ジェンシャン暗殺の依頼が入った。

「ジェンシャンってあの呪術師の？」

「ああ、そうだ」

依頼主がしわがれた声で返事をした。

「お前は異国の出身だろう？ 奴を殺すことに躊躇いは感じんだろう

？」

この国に生まれ育った人間は、ジェンシャンに通っている血を異常なまでに崇めていた。

人殺しを生業にしている者でも、呪術師を殺すことには決して同意しなかった。

「多分、異国出身者でも『人殺し』に嫌悪感を示す奴は捨てるほどいるぜ」

トニーは顔に微かに笑みを浮かべながら言った。

「ま、俺はジェンシャンだろうがなんだろうが殺るけどな」

「君に依頼して正解だった」

そこで依頼主は大きな包みを差し出した。

「代金は前払いだったよね？」

トニーは包みの中身を確認した。思わず息が漏れた。

「俺の掟では、失敗しても代金は返さないことになってんだけど、それは分かってるか？」

「ああ、もちろんだ」

その時、依頼主の目が微かに揺れた。

トニーは失敗したら今度は自分が標的になるだろうことを悟った。  
また、今この依頼を断っても同じことになることをも悟った。

ま、失敗しなかったら良いんだよな。

「じゃあ、最善を尽しますよ」

### 第三話：緋衣草 case 1

此ノ世八閻ガ支配スル。

御前ノ右手ハ其ノ為ニ在ル。

我ノ統ベル世ガ訪レル日ヲ、御前モ望ンデイルノダロウ？

ある時、緋色の目をした赤ん坊がとある夫婦の元に産まれた。

夫婦は息子の変わった目の色に少し戸惑ったが、息子の誕生を抱き合って喜んだ。

夫婦は幸せだった。そしてこれからも幸せが続くと思っていた。

しかし、彼らの幸せの根源が彼らから幸せを奪ってしまった。

彼らの息子の右手が、一瞬にして彼らの命を奪ってしまった。

彼の右手がこの世に誕生することによって生じたエネルギーが暴発してしまっただ。

まだ産まれたばかりの彼に、この右手の力を制御することはできなかった。



御前ノ右手ハ我ノ道具。

御前自身モ我ノ道具也。

御前ハ我ニ從ウヨリ他ハ無イノダ。

……。

「ナースィサス」

「なあに？」

「俺、寝てたのか」

「ええ、ぐっすり、ね」

ナースィサスはクスツと笑った。

「ごめん」

「良いのよサルビア。あなたは毎日コスモス様と『秘密の特訓』をして疲れているんでしょう？」

「……いや、あんなのたいしたことない」

「ホント強がりなんだから」

またナーシサスはクスツと笑った。

「ホントに疲れてなんかないよ！元気だ！」

「それはさつき寝てたからでしょう？」

「……」

「どちらにしろ、もうそろそろ夕飯だね。行きましょ」

「おお。……ところで書庫の整理は」

「サルビアが寝ていた間に終わらせたわよ」

「悪い」

「ツケーね！ほら、行くわよ」

#### 第四話：竜胆 case 2

「この国内にジェンシャン様のお命を狙う輩が居るなんて……」

大臣が力なく呟いた。

「しかし、ご無事でなによりです」

「……そ、ね」

ジェンシャンは微笑を造った。

『自分の命が狙われた』

そのことに彼女はかなり動揺していた。怖かった。震えが止まらなかった。

「ジェンシャン様。あなたは充分分かってらっしゃると思いますが、今回のことはおそらく、いえ、確実に異国の者の仕業でしょう」

大臣はここで一度言葉を切った。

そしてジェンシャンの肩に両手を乗せて、ゆっくりと言い聞かせるように言った。

「分かりますな。これ以上サルビアについて調べるのはおやめ下さい」

ジェンシャンは一瞬はっとして、そしてキツと大臣を睨んだ。

「それとこれと何の関係があるのです！」

「あなたは聡い方だ。お分かりになっているはずだ」

ジェンシャンは大臣の手をふりほどいた。

「分かりません！全然分かりません！」

大臣は大きく、わざとかと思えるくらいのため息をついた。

「御両親に似て頑固でらっしゃる」

「……父や母の為にも、サルビアについて知らなければならぬのよ」

ジェンシャンは相変わらず震えていたが、それは恐怖の震えではなく、怒りの震えだった。

「あなたは勘違いをしてらっしゃる。私共があなたに話したことが全てなのです。それが真実なのです」

「そんなはずありません！納得できません！」

「真実がいつも納得できるものだともお思いなのですか？」

大臣がニヤリという擬音が似合うような笑みを浮かべた。

「あなたはまだまだ子供なのですね」

「……………！！！」

ジェンシャンは拳を握り締めた。

## 第五話：牡丹 case 2

……。この国に留まるのはもうやめるべきだな。

トニー・ピオニは執拗なまでに自身を嗅ぎ回る例の依頼者連中から逃げ回りながら、そのようなことを考えていた。

いつの間にか同業者にまでジェンシャン暗殺未遂を犯したのが自身だと知れ渡っていた。

そうなつて来ると、自身の隠れる場所も限られるし、逃げ場もないも同然だ。

だからいつそ、故郷に帰ろつかと考えた。

もう自分も子供ではなく、ある程度の生きる為の力はある。

だからもう故郷に帰っても大丈夫だろう。

それに、この国からの追手をまくには、あの国しかない。

ヘーリユ帝国しかない。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5211d/>

---

ラバラーゼ

2011年1月12日15時20分発行